

平成 23 年 9 月 10 日（土）

15:00～16:20

富山県民会館 302 号室

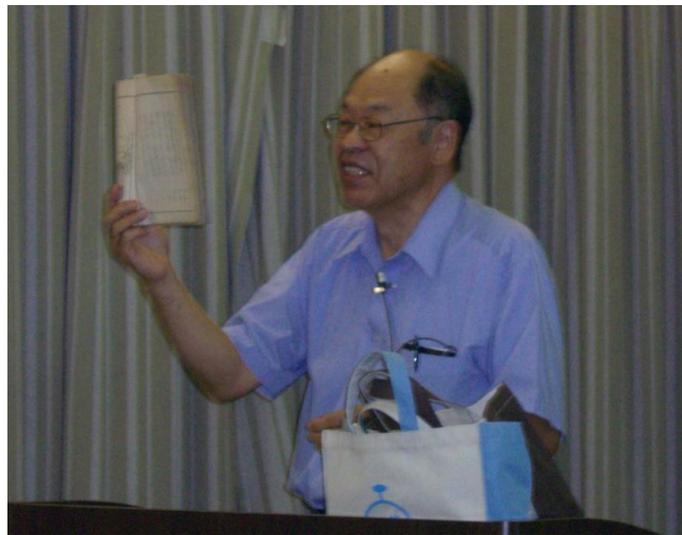
第 2 回 2 限目

「江戸後期の岩瀬俳壇の隆盛とネットワーク」

講 師 富山短期大学

教授 大西 紀夫 氏

東岩瀬には、森家をはじめ古い家が残っていることからたくさんのお客が来られるが、本日私が発表するのは、明治よりもっと前の、幕末の岩瀬の繁栄を象徴する岩瀬俳壇についてである。今は俳句というが、昔は俳諧といって、岩瀬には俳諧をやる人たちがたくさんおられた。その岩瀬の俳人の方たちと全国の有名な俳人との間に、盛んに交流があったという話をしたい。



1. 『八重すさび』に見る県内の俳人たち

『八重すさび』は、岩瀬の俳人たちが作った俳句の本（俳書）である。県立図書館に 1 部、富山大学にも 1 部ある。岩瀬のことを「八重の湊」と言い、「すさび」は「遊び」で「慰みわざ」のことである。『八重すさび』とは「岩瀬の人達の慰みわざ」という意味である。安政 6 年に富山で出版された俳書である。

最初の方に、俳句を載せた岩瀬の人たちの名前が並んでいる。みんな俳号なので物々しい名前だが、最初が晩翠、3 番目に載っている松鶴は永江宇八郎という人で、君輔は岩田氏である。お寺さんもいる。盛立寺というお寺は今もある。裏方戸長というのは役職で、楓齋は明治 8 年に没した若林喜平次という方である。今日、子孫の方もおられる。米屋、宮村屋、牧屋など、屋号もある。

蔵宿の宇兆は大島屋藤兵衛という方で、現在の清水孝一さん（東岩瀬郷土史会会長）のご先祖である。売薬人の二選は米田屋清吉という方である。明治頃まで生きておられた。同じく蔵宿の慶里は、平榎屋儀右衛門という方である。当時の俳書を見ると、この慶里、二選、宇兆の 3 人が一番たくさん俳句を載せていて、岩瀬俳壇の中心的人物だったことが分かる。その中で、今日は主に慶里について述べていきたい。

そのほか、花夕（水落屋庄兵衛）、巨川（黒崎屋）、如松（慶集寺）など、岩瀬の方が最初に載っており、次に富山の方が並んでいる。古人といって、亡くなった方も載っている。県内では富山、魚津、泊、入善、三日市、上市、石動、ナカ居、四方、高岡、福光、伏木、水橋、滑川がある。滑川には南年という売薬の方がおられるが、これは昔、先生をしておられた柚木武夫さん（『滑川の俳諧』の著書あり）のご先祖である。

それから、新庄の淮水（黒川）は結構有名な人である。池田町はどこかの池田町か分からないが、結構たくさん名前が並んでいる。野尻は南砺市福野、それから下村、イグチ（井口）、砺波の石丸、石丸新、戸出、入善、中田、ここは呉西である。六度寺も出てくる。ほかに、砺波の権正寺、入善町の新屋、草島、氷見、小杉、正エン、福岡、マツナミ、古国府、放生津、八尾、棚田、殿村、小西、島、小杉の戸破まで、県内一円を網羅している。岩瀬の方が県内の俳人を集めて載せていったのである。

2. 『八重すさび』に見る他国の俳人たち

他国の人にも注意してほしい。当時、東岩瀬は加賀藩だったので他国とは言えないのだが、能登の宇出津（能登町）の方がたくさん出てくる。どういう方なのかは宇出津の郷土史があまりはっきり分からないので調べようがないが、岩瀬と能登とのつながりが拝察される。能登と岩瀬は北前船でつながっていたということで、輪島の方も出てくる。さらに飛んで大正寺（大聖寺）、山中、加賀（金沢）とあり、金沢で出てくるのが卓丈、大夢である。大夢はお坊さんか俳人か分からない人だが、当時、大変勢力を持っていた俳人である。

そして最後に奥州の須賀川が出てくる。現在の福島県須賀川市で、その多代女（たよめ）という方は、当時、大変な有名人だった。加賀には千代女がいたが、天保時代に活躍したこの方は、千代女になぞらえて「天保の千代女」といわれている。市原という姓で、若くして未亡人になられ、結構長生きされて 90 歳で亡くなっている。昔は女性の寿命は非常に短く、これほど長生きされる人はめったになかった。当時の 90 歳は、今の年齢に直すと優に 100 歳を超える。傘寿（80 歳）を祝う記念の句を載せた俳諧一枚摺や、米寿（88 歳）の記念の一枚摺をちゃんと出している。この多代女と岩瀬俳壇の中心的人物である慶里が交流があったというのは不思議な話だが、『八重すさび』に多代女も句を載せている。

俳壇では、女性の俳人を非常にちやほやする。千代女がそうだ。千代女を研究している人の中には「ろくな句を詠んどらんがに、女だからあんなに有名になった」と、千代女のことをあまりよく言わない人もおられるが、千代女がすごいのは、当時の一流の俳人が必ず千代女のところに立ち寄っていることだ。当時、女性の俳人は非常に脚光を浴び、須賀川の多代女も例外ではなく、ましてや 90 歳まで生きたということで、全国の有名な俳人の多くが多代女を訪ねている。慶里が多代女を訪ねたかどうか分からないが、売薬人の二選あたりはどうも行ったような節がある。それから東岩瀬にはたくさんの売薬さんがいたが、滑川も売薬さんで有名なところ、南年という売薬さんはどうも多代女とつながりを持っていたのではないかと、柚木先生はおっしゃっていた。

このように、『八重すさび』には、奥州の須賀川という距離的に非常に遠方の俳人の句まで載

せている。今はどうということもないが、昔、富山と遠く福島県の須賀川がつながりがあったのは、やはり売薬さんのつながりであろう。

遠方の俳人ではもう一人、京都の公成という方の句も載っている。京都の双林寺には芭蕉を祭った芭蕉堂があり、当時、俳諧のメッカであったが、公成はその五世の庵主である。慶應 4 年に没している。慶應というのはまさに勤皇の時代で、「佐幕派の兇刃に仆る」となっている。つまり殺されたのである。俳諧師でありながら、なぜ佐幕派に狙われて切り殺されなければいけなかったのか。幕末というのは恐ろしい時代だが、面白いことに、次の代を継いだ六世の良大は、師匠の公成のあだ討ちをする。江戸時代はあだ討ちが許されていたので、おとがめはない。これは余談であるが、芭蕉についていた曾良も、もとは武士で隠密だといわれている。いざとなると刀を抜いて復讐をする。昔の俳諧師は骨があったなと思う。この良大は、明治になって氷見などに来ている。砺波のある旧家には、良大の幅が残っている。復讐を遂げた後、全国を放浪して歩いたのである。

なお、慶里は公成とも仲が良く、公成は年刊撰集『花供養』という俳書を数冊出しているのだが、そこには必ず慶里の句が載っている。

3. 岩瀬の俳人たち

慶里はいろいろな俳号を持っている。ちなみに、富大の植村元覚教授は慶里の子孫である。晩年にご本人に教えてあげたところ、非常に驚いておられた。植村さんのご子孫は今、お医者さんをしておられるはずだが、家には慶里が描いた屏風があるそうだ。私も見たことがなく、慶里の没年は幕末ごろというだけではっきりしていないので、ぜひ一度訪ねてみたいと思っている。

慶里は蔵宿だったのだが、蔵宿というのはお米などを預かって北前船に乗せる仲介役で、当時の岩瀬の地図を見ると、現在の森家の前の通りあたりにたくさんの蔵宿が並んでいる。当時、蔵宿が非常に力を持っていたことがよく分かる。岩瀬の郷土史料から当時の岩瀬の地図を抜き出してきたのだが、これは文政 11 年 7 月のものである。「大町百七拾八間」と書いた大通りが、現在の森家の前の通りではないかと思う。このあたりは何回も火事に遭っていて、現在あるのは明治になって新しく建てられたものなのだが、この地図はそれ以前の姿である。

通りの右側の方に、米田屋清吉とある。大島屋藤兵衛（字兆）も蔵宿である。岩田元良（君輔）という人もおられる。逆の方へ行くと、平榎屋儀右衛門とある。これが慶里のことだが、隣家と離れているところから見て、ここに大きな邸宅があったのだ。お寺さんでは、養願寺や慶集寺や盛立寺があるが、ここにもちゃんと俳人がいた。

4. 史料にみる岩瀬俳壇の隆盛

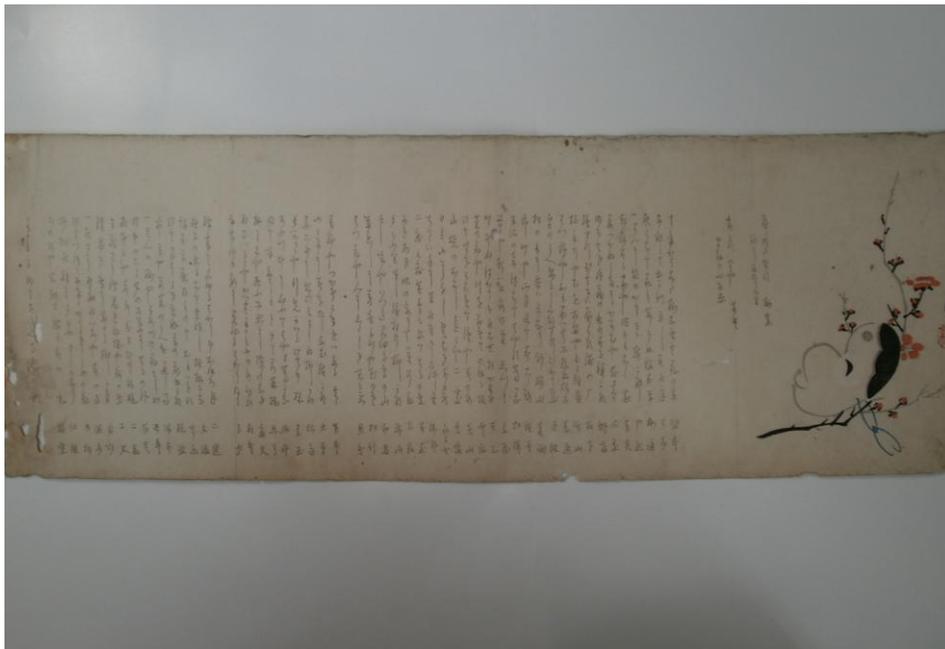
このように、岩瀬にはたくさんの俳人がいて、お寺さんも盛んに俳句を詠じていた。その結晶として、『俳諧 多磨比路飛』のような立派な本も出ている。挿し絵なども描かれた、現在、5 冊ほどしか現存していない貴重な本である。この絵入りの俳書は富山の摺物師（昔の出版社）が作ったもので、後ろの方には画工の名前まで入っている。松浦応真斎守美という売薬版画を

描いていた当時の一流の絵師を使っている。

岩瀬関係のカラーの俳書もある。『画讚百類集』は、まさに岩瀬でできた俳書で、当時、版画でこのような多色刷りのものを出すのは、相当なお金も要るし、大変なことだった。実物は、現在、富山市の郷土博物館と高岡市の図書館にあるだけだ。このような立派な俳書を出したことから、当時の俳壇の隆盛が推察できる。

次にお見せするのは、岩瀬の俳諧一枚摺である。挿絵にはお多福の面が描いてある。当時、岩瀬は加賀藩だったので、これを描いたのは加賀藩の絵師である。ここにどういう人が並んでいるかという、最後に句を載せている人は催主に当たる人であるが、句は載っているが、その下の名前が虫食いのため判読できない。翻刻したものに、最後に括弧付きで慶里と記しておいたが、ここには恐らく岩瀬俳壇の中心的存在であった慶里の名が載っていたはずである。これと同じ一枚摺でちゃんとしたものほどこを探しても残っていない、恐らくこれ 1 枚しかないのだが、全体から見てここに載るのは慶里以外には考えられない。

岩瀬の俳諧一枚摺



冒頭に載っている梅室は、当時京都で活躍した金沢出身の桜井梅室という人である。天保時代の有名な俳人で、嘉永年間に亡くなったのだが、幕末の大家である。芹舎というのは京都の人で、ほかにも慶里と非常につながりの深かった京都の有節の名前があり、さらにずっと見ていくと「たよ女」とある。ここにもちゃんと多代女がいるのだ。この一枚摺は、恐らく嘉永年間のものだと思う。梅室が亡くなったのは嘉永 5 年なので、そのあたりではないかと思う。それから、大夢は金沢の宗匠である。また、柳壺も金沢の人である。その後、ずっと金沢の人が並んで、富山の人に来て、最後の方には岩瀬の人がずらっと並んでくる。掉尾を飾っている人たちが岩瀬の俳人たちで、最後に出てくるのが大体作った人たちなので、間違いなくこれは全

国の一流の俳人を呼び寄せて岩瀬で作られた一枚摺であり、岩瀬の俳壇の一つの記念碑となるものである。

そのお返しということで、多代女が地元須賀川で出した一枚摺に、慶里が登場している。一つは、多代女が傘寿の記念に出した一枚摺である。これには慶里のほか、大夢という金沢の俳人も載っている。最初の方には江戸の一流の俳人を並べて、最後に、80 歳になった多代女が「我国や今にむかしの田うえ唄」と詠んでいる。挿絵が田を植えている早乙女なので、それにちなんで詠んだのだろう。

もう一つは、多代女の米寿記念の一枚摺である。これは正月の一枚摺で、この中にも慶里が出てくる。加賀では大夢がいる。最後に 88 歳の多代女が詠んでいる。「人々に祝はれみつからもいはいて/おもしろや起て出たれば米の春」。90 まで生きたのだから、割とまだ元気である。

このように、多代女は長寿だったこともあって、この時代の女流俳人としては本当に有名だった。小林一茶も多代女と非常に関係が深く、一茶関係の俳書にも多代女が出てくる。このように当時、全国の有名な俳人たちは、さまざまなネットワークによってつながっていたということである。

5. 東岩瀬郷土史会会報より

あとは、以前、東岩瀬郷土史会の会報に書いたものを見ていきたい。岩瀬の俳諧が一番盛んだったのは、幕末の安政期である。『八重すさび』や『画讚百類集』という俳書が出たことが、それを象徴している。

『画讚百類集』を見ると、最後の方に人名がずらっと載っている。この中で疑問に思うのは、慶里が載っていないことである。実は、「物外 盛立寺」の次に「春吏」と書いてあるが、これは読み違いで、正しくは「圭吏」で、これが慶里である。昔の人は俳号をしょっちゅう変えるためややこしい。ただ、下に「平井氏」と書いてあるのが分からない。氏まで変えることがあるのかは分からないが、験を担いだか何かで、いつとき変えたのかもしれない。

全国の俳人を番付にした『俳諧番付』と言うものがあって全国の著名な俳人が載っている。真ん中に載っているのは、行司である。上の方から順番に全国の俳人を並べてある。大関から始まって下は前頭だ。この俳人番付は文久 2 年に出版されたもので、上の大関の欄には当時の有名人である江戸や京都の俳人がずらっと並んでいて、前頭の欄に越中の慶里が載っている。当時の俳句をやりたい人は、こういうものを見て、「ここにこういう人がおるか。なるほど、ではこの人のお弟子さんになろうか」と、参考にしたそうである。

行司役には当時の一流の俳人が載るのであるが、ここに多代女の名前がある。中央に載るのはこの中でもトップにあたる俳人で、京都の有名な宗匠の梅通である。多代女もここに出てくるということから、いかに全国的なネームバリューがあったかが分かる。京都から離れた地方の方がこんなところに載るのは大変珍しい。

金沢の人で行司の方に載っているのは、大夢だ。その上に近江の帆道という人が出てくる。これは富山県の南砺市福野の人だ。元は礪山といったが、これも俳号を変えている。近江に芭蕉の墓がある義仲寺があるが、そこの無名庵十二世として芭蕉のお墓を守っていた人だ。ここ

には、そういう当時の俳壇を左右する有名な方が行司として載っている。

もう一人、前頭に越中の人で、恕兮という人も載っている。高岡出身の野鶴という人も載っているが、この人は雲水といって、行脚俳人とも言って、全国を旅して歩いた人である。野鶴は、高岡なので恐らく商家だったのだと思うが、若くしてそれをやめて、京都へ行って梅室の弟子になり、中国地方を放浪していた。そのため、中国地方ではとても有名である。晩年になって帰省し、48 歳で亡くなっているが、山口花笠など高岡の越友会の俳人や明治時代に活躍した旧派の俳人たちは大体この人のお弟子さんである。

そういう意味で、この俳人番付に越中の方も何人も載っている。岩瀬では唯一慶里が載っているが、このような俳人番付にも載るとするのは、多代女をはじめ他の行司役の俳人ともつながり、交流があったからだろう。

先に、公成という方は、年刊選集『花供養』を出していると言ったが、この中にも慶里が載っている。だから、公成という方と慶里は非常に関係があったということである。この『花供養』には、二選なども載っている。

金沢の大夢は立派なもので、『累葉集』初編、二編などの俳書を出しているが、この中にも慶里が載っている。

京都の有節も慶里とかかわりがあって、有節編の年刊撰集『芳新集』を出しているが、その七編の序文を慶里が書いている。

6. まとめ

岩瀬といえば、今日では観光で有名だが、幕末には非常に俳諧が盛んだった。俳諧が盛んだったということは、経済活動が盛んだったということである。県内でも、俳諧が盛んなところというのは、昔は非常に繁栄していた。港町でいけば、水橋、岩瀬、放生津、氷見、山側であれば、井波、福光などがそうである。今は「みやあらくもん」と言われてしまうが、かつては旦那衆の道楽である俳諧によって同人（グループ）を作ってコミュニケーションをとり、中央



からの情報を集めて経済活動につなげていたのだろう。